

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（每月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日逕輸省特別掛承認雜誌第一三五二號
昭和三十年一月二十五日印刷
昭和三十年一月一日發行

第二十一卷

二月號

淨土



二月號

釋尊の御入滅

佛陀釋尊は年八十に垂んとして尙疲れを知らず説法の旅を續けベーサリーに來られた。ここで遊女アムバーバリを教化し、苑林の寄進を受けられた。之が最後の寄進となつたのである。恰も雨期に當りこの近くで安居（雨期に僧團が一地に集り修行する事）を修した後、北方へ向われた。此時すでに死の近い事をお供の阿難に洩らしておられ

た。途中金工チャンダより食供養を受けられたが其後急に容態悪化し、クーシー城外の河畔、沙羅双樹の間に床を設けて命終を待たれた。そのような際にも異教徒スバドラが馳せ參じたのに教を給い、佛門に歸依せしめられたのである。附近の人々は皆最後の訣を惜んで參集して來た。ついに釋尊は「成りしものは皆滅す、不放逸に勤修しなさい」と最後の言を残して入涅槃せられた。其後佛骨は分つて各々寶塔に納められた。上の寫眞はその昔佛骨を安置した尊い龕で、この中の一部は日本にも奉遷された。二月十五日は、この御入滅を追憶して涅槃會という法要が営れます。



淨土二月號 目次

卷頭言.....(1)	東洋人はかく考える.....鈴木大拙(5)
雪の日.....吉田絃二郎(2)	知・信・行.....藤井實應(9)
ビルマ見聞記.....石井眞峯(13)	ある日蓮僧と語る.....須藤隆仙(19)
ビルマの佛教.....雲藤義道(16)	史話 白隱禪師と山賊長四郎.....藤田和彦(29)
ビルマから.....江守八重子(12)	淨土へのたより.....(28)
宗教人 ハイライト 袋中上人.....大橋俊雄(23)	表紙.....松濤達文



言 頭 卷

今言論界で問題になつて居る福田論文は、日本の進歩的平和論が現實ばなれにして居る點を指摘したものである。確かに日本のインテリと言われるものは、何か起るとそのことを見極めない中に、何か意見を述べねばならないが、それは一般的良識より一步進んで居るか、或は一般の意表を出たものかでなくてはならない。此の様なことを身につけた技術者であるが、同時に平和論になるとソ連的進歩主義の公式に依つて話すマンネリストでもある。福田論文の指摘する様にアメリカ側に立つて居るのに其反對の平和論は全く無意義であるし、例えば基地のなくなる可能性のない時には、その設定に協力しつつ改善の方途を講ずることは確に現實的である。此のことについて共産黨の指導者の一人に直接聞いて見たら、「福田なんてのはアメリカから來たバチルスだ」と言ひただ感情的に惡口を言うのみであつた。我々佛教徒は、ビキニの灰をかぶつた後だから、福田氏の所論についてはそのまま認め難いが、現實を正視し、現實に可能な平和論をなすことは賛成である。ソ連と國交が始まろうとして居るが、尙更のことが現實ばなれの理論や感情論は止めるべきである。



雪の日

吉田絃二郎

初雪が降つてくると子供たちは手を叩き、踊り上がつてよろこび、聲を張り上げて唱う。

わたくしは昔瀧の川に住んでいたことがあつたが、門の外を毎日小學校の子供たちが通つて行つた。ある日初雪が降つて來た。するとわたくしの門の前を通りかゝつていた子供たちが聲を張り上げて歌を唱つていたが、それはかれらが道を歩きながら作つた即興詩であつた。

かれらはへんぺんとして大空から舞い下りて來る初雪をたゞ物理學的・自然現象として受け容るゝには、餘りにゆたかな詩人的感激を持つていた。わたくしは亭々とそびゆる^{けやき}樺の並木の下を初雪に降られ、即興詩をうたいながら丘の坂路を下つて行つた子供たちの姿を、あの朗かな歌聲を今日なお忘れることはできない。

子供たちはいつても詩人である。だから風に吹きまくられてゆく落葉の群を見ても、その一枚一枚の木の葉に聲なき歡聲、聲なきおしやべりを感じ取るのである。

しかも人間は老ゆるにつれて詩の心を失う。

わたくしたちは老ゆるにつれて、初雪を見てもよろこびに胸おどらせることもなくなつてしまふ。詩の心を失つたからである。

おさな兒は天國を見ることが得るといふのは、かれらは詩を持つてゐるからである。

勇躍して念佛申す心はおさな兒の心である。一切の疑念を斷ち、一切を信じ、一切をよろこび受け容るゝおさな兒の心である。詩の心である。

老いても老いても詩の心を失つてはならぬ。

昔の聖人と仰がれる人々もおさな兒の心を失わぬ詩人であつたように思う。

古の聖人たちの身邊には紫雲がたなびき、香煙がたゞようていたなどと、高僧傳には書いてあるが、それらの現象を否定することはできないほど、聖人たちの御生涯は美しい詩の心に彩られていた。

瀧の川に住んでいたところは西ヶ原にはまだ家もあまり見られなかつた。飛鳥山の前に一とかたまりの小さい店屋が並んでゐるに過ぎなかつた。

雪の深い日であつた。わたくしは東京からの歸りを王子驛で降りて、飛鳥山の前にさしかゝつた時雪の中に足駄の鼻緒を切らしてしまつた。すると知らない店屋のおかみさんが飛んで来て、雪の中で鼻緒を直してくれた。おかみさんの手を取つていたゞきたいほどにありがたく感じた。三十餘年の昔のことになつたが今でも雪のころになると、時々思い出す。かすかな詩心がよみがえる。

雪の夜になるともう一つ思い出すことがある。わたくしはそのころ根岸の里に住んでいた。

月に一度くらい入谷の方から夜になると門付にやつて来る新内語りの老婆があつた。蘭蝶、赤

坂の彌次喜太が得意であつたが、たびたび門付する間に、玄關の格子戸をあけて、座布團を布き茶を出すようになった。自然かの女の身の上話までも聴くようになった。

かの女には孝行な息子があり、幸四郎の弟子で名題まで昇進して、帝劇の舞臺を踏んでいたが兵隊に召されて旅順で、戦死してしまつた。後には娘が一人あるが、不孝な子で、寒い雪の夜でも、老婆を門付に追い立てるのであつた。

わたくしたちはしばらく門付のかの女を見ない時は、耳をそばたてゝ夜の街を流して来る老婆の三味線の音を待つていた。

わたくしたちが根岸の里から瀧の川へ引つ越すことになつた時のことであつた。雪の夜路を歩いてかの女が訪ねて來た。かの女は小ざつぱりした態なまをしていた。

かの女はわたくしたちの引つ越しを悲しんで泣いた。

「瀧の川へ引つ越したつて、そんなに遠いところじやなし、時々訪ねておいでなさい。」といつてかの女を慰めたが、老婆にとつては入谷から瀧の川までは大變な道程であつたにちがひなかつた。まだそのころは電車の便もなく、下谷金杉から懇意な醫師に來診を乞うたら、紋付の羽織を着て、金杉から瀧の川まで人力車に揺られて來た。

そんな時代であつたから、府下の瀧の川といえばかの女にとつては、もはやこの世では逢うこともできない遠國のように思われたのであろう。かの女は形見のつもりであつたろう、古備前の柱懸け花生を残して、雪のなかを薄闇に吸いこまれるように靜かにかえつて行つた。雪の夜、老婆を思い出せば、そこにも、そこはかとなき詩心は動く。合掌してかの女の冥福を祈る。

東洋人はかく考へる

文學博士

鈴木大拙

一 東洋と西洋

東洋人の考え方とか、東洋的考え方が特別にあるかと云われるようだが、私が日本を離れて、外國人、すなわち、西洋人の間にしばらくいて、見たり聞いたりした事を綜合し見ると、これ迄、ずうと考へていた様にやはり、西洋人と、東洋全體の人の考え方に相違のあることに氣づく。

例えば私、今から五十年程前ヨーロッパから歸つた時、アメリカに十年と、ヨーロッパに一年以上いて、印度洋から地中海を通つてそして、スエズのカイロからインド洋へ出て日本に來たが、その時地中海で今でも忘れないのは、スエズのカイロに渡つて來ると、西洋から來ると左側になるが、この左側に、ラクダが坐つていてその陰に人の坐つている景色を見て如何にも東洋的な感じがした。今迄西洋やアメリカに居て、西洋人の中にまじつて西洋の文物を見て、そして、スエズにかかると、ラクダと人、ラクダは如何にも悠長と

した太古を思わせるが、そこに人間がついていて砂漠に寢ているのを見ると、そこに、よほどの兩者の違いを感じさせる。單に違いと云うのではなく、ヨーロッパでも、牧場の眞中に牛が寢ていると、その中に人の寢ている景色があるが、その時の牛の中の人間と、ラクダの中の人間の感じ方とは違うのですね。同じ光景で同じ様だがそこに、云うべからざる感じがある。なる程ここに、東洋人の考えがある、西洋人の物の考え方と違ふものがあると云う感じがした。

初日本を出る時はまあ廿六、七だつたと思うが、その時はまだ、何も日本の外を知らないし、すべて狭い考えをもつていた。しかし歸つてから、物事が見るもの、聞くものすべて一種の趣きをもつて來る。今迄そんな事がなかつたが、十二、三年外に居て歸つて見ると今迄、日本だけで見たり聞いたり感じたり考へていた事が、他の國にいて、もとのものを見ると、よほど異つた感じがする。それが東洋的考え、東洋的感じ方の何か、そこに、基になる材料があちこちとところがつっていると云う事になりはしないか。つまり、我々歴史

的な人間として、そして、これだけの日本なら、日本の文化をつくり上げて、色々なものが残っている。そして、それに接すると、それから出る空氣が、自ら我々の生活の中に沁み込んで来る、そこにどうしても東洋的なものと、西洋的なもののある事を感じさせる。

私の場合若い時出て十年以上も他の國にいて歸つて見ると、これが本當の東洋的なもの、これが、我々を育てた日本的なもの、それを深く味う事が出来る。唯味うだけに留らず、ここに、西洋の人と東洋の人の感じ方、考え方、に相違がありこの單なる相違でなく、この相違の中から互いに助け合う事が出て来て、その助け合う事に依つて、世界の文化に東洋の文化が大いに務めねばならないと云う感じになつて来る。この事について私は少しこれからつづいてしばらく話したいと思うのです。

二 永遠を基調として

この東洋の人と西洋の人との考え方の違いと言う事についてここに學問的にどう云う典據でどう云う依り據でどう云う話しをするかと云う事をいちいち申上げる譯には行きませんが、大体の所は間違ないところ云うつもりです。

所でこれは大部先の話でありますけれども、西洋の人のある雑誌に書いておつた話しを思い出すとその人はシナに長くおつた人だがその人がシナの人の住まい方、感じ方、考え方について云つておる事は、吾々、西洋、ヨーロッパやアメリカ人の人がこうして何事も何事もシナの北京なら北京、上海なら上海のあの所にかたまつて、

しよつちゆうシナの人に接しているのであるが、そのシナの人々は吾等即ちつまり歐米の人のやつておる所をまねしようとかそれから何か得ようとか云う様な事を全くしないで、つまり何等影響を受けないで、外國人との接觸から何等の影響を受けないで、自分等の昔からの生活をそのままに續けておると、これがはなはだ異常に考えられると云う様な話しを書いてあつたのを、大分前だが思い出す。

そいつはある點で云うと、おかしいといえはおかしいので何もそのシナの人々が外國の人が來たからと云つてそしてその人から影響を受けなければならんと云う理屈はないので、自分は自分等の生活をやつていればそれでよし、そしてその方が外から來た人々のやつておる生活よりズーとある點に於いてはいい事であるのかも知れないのだから、そいつを捨ててしまつて、今ヨーロッパの人が來たらと云つて、今の日本人のある部分の人がやる様にそのまねをせんならんとする事はなにもないので、シナの様な大きな國で古い歴史をもつておる民族はそこにちゃんとした自覺をもつてゐるのだから單に外國人から何だかんだと影響を受けんならんと云う様な必要はないのですな。

こう云う事を批評したヨーロッパの人であつたか、アメリカの人であつたか忘れたが、そんな批評ははなはだあたらん批評的をはずれておるとこう云つてもいいのである。

そこでシナの人々、日本の人々が西洋の人々から受ける批評と云うものの中にこう云う事があるですね。東洋の人は永遠そのものだと、永遠そのもので、時間の経過と云う事に對してあまり關心をも

たらないと云う様な事が批評の一つになつておるが、この東洋の人々の生活が永遠性そのものだ云う事は、はなはだ私は面白い。

もし東洋の人と西洋の人との間に根本的な考えの違いをみつけると云う事にすれば、東洋の人は永遠に住んでおり、永遠そのものを生きてゐる、西洋の人は永遠をぶつぶつに切つてしまつてそうしてそれを、時間と云うものにしてそうしてその時間を次から次へと追つて生きておると云うあんばいに云つたらどうかと思いますね。

その點はどうかと云うと空間的に話しをすると、シナの國にしてもああ云う膨大な國であるしインドの國にしても大きなものでありまあ日本は島國と云えやつぱり東洋の一部としてシナに屬しインドに屬しておる。ある意味に於てはそう云う廣々とした國々の人である。ところがヨーロッパの國々の様に小さな國をそいつを又小さに分けて、そして今日から云うとまあ一時間もたたんうちに、一つの國から他の國へ渡つてしまふ。そんなこせこせとした所にすんで生きておる人々であるから、そう云う人々が東洋の所へ來て、どこへいつてもいきづまる所が無いと思われ様なところへ來ると死んだ人間を如何にも永續性を持たせた永遠そのものに生きてゐるかの様に感ずると云うも、もとよりの事であらうと思うのですね。

そう云う點、西洋の人々は自分の國を本位にして考えるから我々も又我々の國の國民の考え方と云うものが、あるからそこに考え方の衝突と云うものが出て來てお互に批評し合ふ事になつて自分の國がいゝように話をするが、そのいいように話しをする所も甚だ愛嬌があつて、いゝのであるが、こいつが喧嘩になつて殺し合ふ、とい

かにも馬鹿げた事になつてその極度は何かと云うと人類滅裂と云う事になるかも知れんと云う様な事に今日はなつておる。

それとつまり東洋から云うと人類の滅裂と云つても今の人類が、人類だけではない今の世界がこわれても又次の世界が出て來る、世界は出來たものだから何時かは、こわれてしまふのだから、そいつは何でもない、そこに一つのこわれないものが残つて行くのであるからたいした事はない、と云う様にまあ東洋の人は永遠そのものに生きてゐるのであるから、時間と云うものと空間と云うものに何等の心配も持たん、これが時間の永續性である。

空間と時間とに無限大に生きておると、こゝに大きな相異が出て來て東洋の考え方がこゝから出て來るのだと私は信じます。

三 人間中心でいく

今申し上げた永續性と無限性の上に東洋の人は生きてゐる。又その永續性無限性そのものを生きてゐると云う點から考えをきめて行くと云う、その間に東洋と西洋の大いなる違いを感じざるを得ない。

西洋の人は時間性で生きてゐるから物事にきりをつける、こゝからあそこ迄と云う様にその時々刻々に生きて行くと云う事に就いては物事が規律だつて行く、論理的に行く。ところが東洋の人から云うと無限の上に立つてゐる。永遠そのものに生きて行くと云う事になると、そこに區切をした論理と云うもの、あるいは規律と云うもの、あるいは法則と云うものにあまり頓着しない。法則なら法則そのものをこしらへる元にかへつて行こうとするから、かへつて法則

そのものを無視する様な場合もある。

西洋の人は法則をこしらえて、かへつて時間と云うものの上に立つて物事を束縛しようとするから、それに縛られると云う事になる。縛られると云う事は尊重すると云う事になるが、少くもそれに縛られて動かないと云う意味ではなく、法律なら法律、規則なら規則を尊重して守つて行くと云う點では甚だ東洋の人と異つた點があると云つてもよい。

東洋の人は法則と云う様な事については西洋の人の様に關心を持たない。従つて法を重んずる事より人を重んずる。人を重んずる事は、法を生み出す、つまり永續性そのもの、無限性そのものを尊ぶと云う事になつて、その永續性、無限性を體得してゐるのは人間であつて、法則でないのだから、法則は人間の造り出したもの、その法則を作り出す人間の方が本來の價值を持つてゐるという考である。その様な事は必ずしも東洋の人が皆自覺してゐる譯ではないが自覺と不自覺にかかわらず、その様な事に生活の基調をおいてゐるのであるから、自からなんとなく知らずの中にその様な感じ方、考え方が出て來ると思う。その様な事もよからうと思ふ。

この人を重んずると云う點であるが、これは、アメリカのエール大學の先生のノースロップと云う人が印度を廻つて來て歸りの話にこんな事を云つてゐる。西洋の人と東洋の人の考え方は、西洋の人はこの法と云うものを作り上げて、それを守つて行くが、東洋の人は法より人を重んずる傾があつて、法律よりも人情と云う様な點で、法律を無視する傾向があると云つたが、これは本當だと思ふ。

その西洋の人は法律の方を重んじて行くと云う。この法律と云うものはローマ時代に出來上つていてエダヤの人にしても律法と云う事を重んじる。印度にも、印度にはこのマヌの法典と云うものがある。と云うが、印度やシナの人よりもその點西洋の人の方が法を重んずる事は強い。東洋の方ではそれ故組織と云うものが出來上つていない。人間を重んずるから組織が後になつてそれに人間が縛られて行く。と云う事にしない様に物を取計つて行くと云う處で、この人間と云う事の考え方が私は東洋の人と西洋の人の間に大分異つてゐると思ふ。

この點で又今の人と云うものを永續性の上に見る見方と、人間を規則や法律や色んな組織をこしらえてゐる一つの單位として見る見方と、この人間の見方が二通りある。一つは西洋的、今一つを東洋的としておけば、西洋的なものは個人の道德的責任として重きをおき、東洋の人はその點については西洋人程に難しい考え方をしないと思ふ。

そうするとその點で二つに分れるが、西洋の人はその分れる處を氣にして道德至上と云うか道德の外何にもないとして善惡のけじめを何にも縛りつけそこに個人的責任と云うものに對しても深き關心を持つてゐる。この點は甚だ結構で我々もそう在りたいと思ふが、そうすると一面東洋的感じ方、考え方について西洋の人はあまり限られすぎてゐてその間に自由を缺くと云う事が大いにあると思ふ。この點に於いて西洋と東洋の違いも又見られる。(つづく)

知・信・行

——一言芳談抄講話(五ノ下)——

藤井實應

明禪法印云、赤子念佛がよきなり、さかしだちたる事どもきこしめして、仰せられて云・身の程知らずの物覺えず。

顯性房の云、小兒の母をたのむは、まつたく其故を知らず。たゞたのもしき心あるなり。名號を信敬せんことかくの如し。

明禪法印は天臺の檀那嫡流の大學者、顯性房は西山善慧上人の弟子であります。赤子念佛というのは顯性房のお言葉で明瞭であります。賢こそうに念佛はこうであるあゝであるなど、いうと、明禪法印から「身のほど知らず、不覺人だぞ」と叱られます、仰せのまゝ赤子念佛になるより、南無阿彌陀佛。

然阿上人云。聖光上人は談義の最中にも、日中の時きたれるときは、一文一句をも誦しさして

「やがて阿彌陀經をはじめ、禮讚念佛を行じましましき。同聞の聽衆も心ならず各別に禮讚をしき云々。」

然阿上人は淨土宗第三代と仰がれる方、聖光上人はその恩師であり、法然上人のみ教を繼がれ淨土宗第二祖と仰がれる方であります、聖光上人の日常の御生活のほどがうかゞわれます。

談義説教の最中に於てもかようでありましたから、他は以てその行道の嚴しさが拜察されるのであります。是をもつて、學問は末であつて行法は本であることが知られるのであります。學問は好んで寢食を忘れる人もありましようが、行法を専らにして、學問をさしおく人は少いのであります。まして今日今頃は、その學問すらも省みず、たゞ衣食のことにのみ走りまわる、吉水の末流の有様を見、自らの姿を省みて、たゞ／＼慚愧に堪えぬ次第であります。

法然上人のすゝめたまうた念佛は信行具足の念佛であります。「信をば一念にむまると信じ、行をば一形（一生涯のこと）に勵むべし」とも示され、「淨土に往生せんとおもはゞ、心（信）と行とのふたつ相應すべきなり」なども説かれております。阿彌陀佛の本願を信じては南無阿彌陀佛と申す行となり、その念佛の行は本願を信するすがたであります。ですから「只往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申せば生れると信じて申す」うちに、信も行もふくまれてゐるのであります。行をなくしては信はなく、信なくしては行も失われます。信行は念佛に具足される裏・表にすぎぬのであります。それゆゑ念佛の行が大切であります。

淨土宗の歴史を概観しますと、宗學は盛んであつても、行法の衰えた時は宗も衰えたと一應いえるのであります。徳川時代檀林でたくさんの學問僧は養われましたが、學問僧は多く出ても念佛の實際が行われません。形は盛んなようでも、宗の實際は衰えております。彈誓上人とか稱念上人とか、關通上人とか徳本上人とか大日比三師等よく念佛の行ぜられた上人方の出られた時代には、その教化のゆきとよくところ念佛が申されて、宗は實際に盛んになつたといえるのであります。徳川時代はさておき現時は如何であらうか、宗門の大學を出ても念佛が申されぬ人が多いのではないでしようか、大に反省せねばならぬところでありまゝす。山崎辨榮上人の創唱された光明會の現状についていろ

／＼の批判もありましようが、念佛をよく申されることは何といつても尊いこととあります。こゝで學問と念佛のことにつき「學問」の部にある一つの法語を頂くことにしましう。

敬佛房云、非人（遁世の僧のこと）法師の身に學問無用といふことも分際あるべき事なり。器量あらんものは、形の如く往生要集の文字讀み風情の事をもて、生死無常のいとふべきことわり、念佛往生のたのもしき様など、時々はくり見るべきなり。されば明遍僧都の御房も、念佛者の十樂おぼえざらんは無下の事なりなんと仰せられたるなり。又學問すべしといへばとて、一部始終を心得わたり、文々句々分明に存知せんなどいふ心ざしは、ゆめ／＼あるべからず、たゞ文字よみななどしたるに、やすらかに心得らるゝ躰なり。大要貴き所くり見るほどの事なり。此故實を得つれば教の本意に相違せずして後世にすゝむ大要となるなり。又他をすゝむる利生のため、ことに大切なり。又これ程の事なりとも、我執名聞もまざる様におぼえ、一向に之を停止すべし、藥を毒となさん事、返々お

ろかなる事なり。一文一句なりとも、心得によりて、念佛もまめにおぼえ、後世の心もすゝみかきいそぐ様なる心ばへいでくる躰におぼえはたふとき文どもをも時々は見るべきなり。但し天性器量おろかならんものは、これほどの學問もなくとも、一向稱念すべきなり。行をまごゝろにはげまば、教の本意にたがふべからず、信心道心も、行ずればおのづからおこることなり。

敬佛房は法然上人の弟子で常陸の眞壁に居ましたが後、明遍僧都に師事し高野に寓した人で、敬佛房の法語は相當たくさんあり、何れも心うたれるものが多い。

この御法語は「一言芳談」中最も長い文であり、事ここまかに、まちがわぬよう、あらゆる場合を顧慮して親切に説かれていきますから、蛇足を加える必要は少しもありません。

「一言芳談」について述べたいことはまだ／＼あるのですが、五回で一應まとめるようにとの編輯局からのお話であり、かつは前にも申述べたように、此書は講話などするよりも、拜讀してはよくよく味ふべき法語集なのであります。私はこの尊い求道の書を紹介の意で、ほんの一部の法語を擇んで、その一端を味わせて頂いたにすぎぬのであります。志あり縁ある方々は進んで直接「一言芳談」をお読み下さることをおすゝめ申します。(終)

大正大學々生募集

一、人員

大學院

〔佛教學(二〇〇)宗教哲學(二〇〇)國文學(二〇〇)〕

文學部〔哲・史・文・社會各學科四〇〕

佛教學部〔佛教學科(四〇)〕

二、出願期日

一次 一月十一日—三月六日(學部)

二次 三月九日—三月二十七日(大學院學部)

三、入試期日

一次 三月七日、八日(學部)

二次 三月二十八日、二十九日(大學院學部)

四、

詳細は入學案内參照(入學案内は宛名明記封筒及三〇圓封入大學事務局入試係へ)

東京都豐島區西巢鴨四丁目五三〇

大正大學

大正大學高校(夜間)生徒募集

○募集人員

第一學年(普通科)(一二〇)

第二、三、四學年(補缺若干)

○願書受付

二月一日より選拔試驗前日まで

○資格

第一學年(新制中卒程度)

第二、三、四年(相當の年齢學力あるもの)

○試験期日

三月二十八日

ラングーンに来て一ヶ月、先年
パキスタンのダッカに苦勞した生
活からみると一通りは都會の事と
て不自由はありません。

しかし、やはりいづこも同じ東
西南北の民族性と申しませうか、
約束の破棄、怠者、生活レベル、
考え方の低い事などが目につきま
す。家が拂低しておりますので、
まだホテル生活を致し
ております。ここへ來
て一番羨しく思つたの
は、ラングーン市中ど
こも空地だらけ野あり、丘あり、
大木が繁り、箱根にでも參らなく
てはと、思われる閉靜さで人口も
少く、まだ百萬に満たないのです
一步田舎へ入れば人口はいよいよ
稀薄で、移民が許されたらなどと
勝手な考えをしています。ビルマ
人というのは戦前一番低い階級で
此地はインド下にあつたこととて

インドの方が多く、現在はイン
ドを追出すべく政府は計つてい
と云われます。經濟力から云つて
も殆んど大商店はシナ人、インド
人がこれにつき、ビルマ人の商人
はほんとに數える程と申されます
佛教國ですから、全部の人が壯年
には必ず僧侶となつて三ヶ月の修
業をするのです。日本のかつての

ために働くという考え方で、貧富
それぞれ税としてバコダにお金を
おさめるとの事。
女の装いもはじめは何だか腰巻
姿のようでおかしく思いましたが
昨今は若い人が美しい布地を巻い
ているのをみかけると、やはり長
年身につけた着物は次第に精練も
されていく事がわかりました。

手傳つて、夜はなく、二、三時間
に一つ位で、いい階級のものには利
用しないので余り發達しない由。
バスも汚れており結局、私共は自
動車か力車リキヤです。力車が奇抜で、
お客が運轉する人の脇に二人乗と
なる時は背中合せに腰かけるので
初めは吹出しそうになりました。
この國では、之から自國の製品
が出来ると思ひますが
何から何まで輸入だの
みで、全く高値で勿體
ないように思われます

ビルマから

皆兵と同様でございます。貧乏國
であるのに宗教的のものはほんと
に立派なものでバコダ塔はさすが
に世界に誇る大規模なものでござ
います。郊外にも世界佛教徒大會
に竣工された大規模な岩屋やバコ
ダがあります。余計な心配ですが
よく之だけの工費が出ると思つて
聞けば、一生バコダに入れあげる

日本に比して女の人で勤めに出
ている人は徹々たるもので、其點
日本へ來たビルマの人がオフィス
に働く多くの若い女性群を見て、
反對に日本の女の老人が少いなど
と感ずる所以でもありましよう。
當地のウエイトレスは皆黒く大き
なひげ面の男のみでございます。
汽車は、まだ治安の悪いせいも

例の黄變米の産地で皆様から憎ま
れて居るのですが、ここで食べま
すビルマ米は、殆んど日本米と同
じ臭くも汚れておりません。やは
り日本の買付け方が悪いせいでし
よう。パンコックからビルマまで
空から見た廣大な田はまことに羨
しく思ひました。ではこの邊で又
(ラングーン・ストランドル
ホテルにて江守八重子)

ビルマ見聞記



石井眞峯

昨年十二月三日から五日までビルマの首都

ラングーンで第三回世界佛教徒會議が開かれ私は日本佛教代表の一人としてこれに出席することになった。十一月三十日夜八時半羽田から日航機シティー・オブ・ナゴヤ號で出發した。機の長さ約廿間、翼の長さも廿間、一萬馬力という大きいもので時速百里であるそうだ。私はアメリカへ行つた時は昔のことだから船で、三日ぐらい船酔いのため具合が悪かつた始末だから飛行機では必ず酔うものと思つて乗る前から藥を吞んだりしたがその心配は全く無用で、實にすばらしい飛行を續けた。天候もよく、まるで疊の上と少しも異ならなかつた。翌朝、すなわち、十二月一日の朝にはもうラングーンに着いてしまつた。所要時間たつた十三時間である。地球は實に小さくなつたと思つた。

私はビルマに十二月十日まで居て、その朝印度に飛び佛陀伽耶、王舍城、鹿野苑、ベナレスの佛蹟に參拜、ガンジス河を見學して十八日再びビルマに歸り、廿日早朝同地出發その夜おそく羽田に歸つて來た。三週間の旅行では詳しいことはわからぬが、一二見聞した

ことを綴らせて頂く。

ビルマのラングーンでも、田舎でも黄衣の比丘の姿が多い。比丘達はよく戒律を守つて佛教の教えを民衆に説いている。だから一面基た非生産的、非活動的に見えるが、それについて民衆の尊敬を勝ち得ている。世界佛教會議の發會式で大統領が長老の比丘に五體投地の禮をして比丘より一段低い席に民衆と一緒に座つてゐるのを見たが必ずしも形式ばかりではあるまい。日本の實狀と比べて頭の下るものがあつた。

私はベグの寢釋迦の參拜に行つた時も自動車止つてゐる間に民衆をのぞいて見たが路傍の小さい家にも佛壇がある。そして本尊は釋尊である。お花、ろうそく、線香が供えてあるのは日本と同じだ。祖先の位牌はない。生活指導のための佛壇である。日本の祖先崇拜と少ちがつた佛教であることは吾々としても少し考へて見る必要があるのではないか。こうしてビルマでは佛教が民衆の間に生きている。私はウー・バー・マンという立派な紳士と知り合つた。この人は六十越してゐる人だがビルマ佛教青年會の副會長をしてゐる

人で、そのお宅にも数回行つたが自動車も二三臺ある立派な暮らしをしている。私も又もう一人の日本代表もこの人に大變厄介になつたある時その應接室で氏の好意を感謝したところ、そんなに禮を言つて呉れるな、私は自分でやるべきことをやつてゐるに過ぎない。私の名詞の裏面を見てくれたかという。そこでかねて貰つた名詞の裏面を見ると次の如き言葉が英語で印刷してある――

「幸福に生きよう

楽しく人の爲めに働こう

あらゆるむさぼり、憎しみ、強慾を捨て

よう

そうすれば我々の生活は楽しくなるだろう

う」

私はこの言葉を讀んですつかり感心した。

もう一人の代表にもその意味を解して聞かせその活きた教訓に接したことを共に喜んだことであつた。

だからこそ氏はこう言葉を續けた。「私は日本に對して好意を寄せてゐる。すべての點で日本を愛する。只戰爭中、一部の日本兵に掠奪をされた。これはまことに残念だつた。し

かしそれも忘れてゐる。」そして氏は「この世に於て怨みは怨みによつてやみ難い。ただ怨みなきによりてこそ、この怨みはやむ」と法句經の言葉を引いた。私には言うべき言葉がなかつた。只一部の日本兵の亂暴を心から詫びたのである。同氏のような人こそ釋尊の教えをそのまま地で行つてゐる人だと思つた。

それから私はビルマ人は酒を呑むかと尋ねたところ、國民の八十パーセントは呑まない。呑むのは西洋かぶれのした連中ばかりだと聞かされた。同氏は更に語をついで、「私が藥用に葡萄酒を口にする時でも私は妻も子供も氣づかぬようこつそり自分の寢室で呑むので決して家の者は知らない。」このことは實は東京出發前外務省の事務官の方からも聞いていたのだが、このビルマの人からも同じ話を聞いていよいよその事實であることを確かめ得て深く反省させられた。勿論これは五戒が守られてゐるばかりでなく他にも理由があることと察せられもするが、とに角大多數の國民が飲酒しないということは大きな事である。

それに比べて日本では全くその逆で八十パーセントの國民が飲み、二十パーセントの人

が飲まないというのが實情であらう。必ずしも酒がいけないとは言わないが日本の酒の呑み方は賛成出来ない。大體今の大人がいけない。宴會でもどこでもばか呑みをし、飲めばさわぎ、卑猥な歌をうたひ、汽車の中でも、街頭でも平氣で人に迷惑をかけ、それで民主主義を口にしてゐるから話にならぬ。だから若い者までがこれを眞似て當り前だと思つてゐる。この間もスエーデンの宣教師から聞いた話だが彼の國では酔拂いは汽車に乗せないそうだ。有難い國だと思ふ。そののみか寺院の者までが平氣で大酒を呑み法衣を脱ぎ捨て踊り出すのではビルマ比丘から墮落佛教と呼ばれても致し方あるまい。南方佛教を小乗と呼び、我々は大乗佛教だといつて一段上であるように考えることは餘程の反省して見なければならぬ問題だと思ふがどういうものであらう。

それからビルマ佛教會議會場の大規模なのに驚いた。十九億圓の巨費を投じて作つたというのである。たとえば新聞にも寫眞の出したあの講堂であるが一萬人を收容すると言われている。その他に三階建ての廣大なビル

が五つ立っている。その一つは二千五百人が一時に食事の出来る食堂である。吾々はビルマの一つの三階に宿泊したが全部新しい個々の寢臺で、室の中には澤山の扇風機が用意してあつて十二月だというのに朝から使用したよるな暑さだつた。便所も水洗式だつた。只困るのは風呂のないことで、私は大使館で一度入浴したのみでビルマ滞在二週間のうち一度も入浴しない。

これ等の建物が十數萬坪の敷地の上に立っているのだが、ビルマはこれを國際佛教大學にする計畫を持つていて、恐らく明年それが實現されるのでなからうか。若しあれが大學として開放され、優秀な教授と學生が世界から集ればビルマは世界佛教の中心となるのであらうと思われる。現にそういう意氣込みでやつてゐるようで、そうでなければ七葉窟をかたどつてあんな大きな講堂など建てなかつたらうと思う。眞にビルマで佛教を研究しようと思ふ日本青年があるならよこして貰いたい、但しビルマの比丘と同じ生活に堪える堅い志の者でなくては困るとウー・バー・タン氏も繰り返し言つた。こうして多數の日本青

年僧がビルマの戒律嚴守の比丘の生活を日本に取り入れて呉れば少しは日本佛教にも生氣が注ぎ込まれるであらう。印度のカルカッタでバル博士に會つた時博士は日本佛教は博物館の佛教ではないと指摘された。博物館ならまだよいとして更に寺院の使命を忘れて大變なところに行こうとしている方面もあるのではないかと心配するのは私だけだらうか。

前にも述べたように佛教會議の發會式は大講堂で行われたが日本以外の比丘は全部黄衣で、悉くが一段又は數段高い所に着席した。日本代表も今度は一般民衆と離れた一段高い所に座つたのだが、全部が黒い改良服であるため周囲と調和がとれない感を抱かせられた。勿論日本は千四百年の間に獨自の發達を遂げた佛教であり、また佛教僧の服裝であるから、それでよいと私も賛成してあの服裝で揃つて行つたのだが何か知ら一種の不調和を感じた。或は黒でなしに茶色の改良服の方がよいのではないかと思う。私も一枚茶の改良服を持つていて時々着用するが、これなら他の國々の黄衣とも調和すると思う。服裝のこ

らう。

最後に會議に使用された言葉のことを少し述べて見たい。會議はすべて英語だつた。ビルマは英國の勢力を植えつけられた國だから一應知識人は英語がうまい。各國の代表も中々達者で富樓那の辯舌を持つてゐる者もいたところが日本代表はこの點で各國代表に比し非常に劣つた。失禮な言い分であるが、英語のうまい人は皆無の有様で、中々通用しない。築地本願寺での歸國歡迎會の時もその話が出た、あのような會議には日本語の發言に通譯をつけることを許すべきだとの意見も出た。それが出来ればよいが各國が皆自國語でやつて一々通譯がついてゐては大變な時間がかかる。私は英語専門で今度の會議にも一役引き受けるつもりでいたが色々準備の手ちがいやら、何やらで思うようにそれが出来なかつた。但しビルマでのお茶の會の挨拶、印度での晚餐會、鹿野苑の學校での挨拶、見學買物では出来る限りお手傳をする機會を得たことを喜びとした。とに角佛教國際會議出席の日本代表の語學の問題は今後檢討する必要があるであらう。この問題は更に別の機會に論じたいと思う。(二月廿日)

ビルマの佛教

「世界佛教徒會議に出席して」

雲 藤 義 道

預備、ビルマにおいて開催されました第三回世界佛教徒會議に、日本代表の一人として出席しました。何しろ短期間の會議のことであり、群盲撫象の譬えにもれませんが、思い出すまゝに、ビルマの佛教についての若干の印象を述べて見ましよう。

ビルマは御承知の如く南の國、亞熱帶に位する大陸で、十二月と云うのに日中は氣温が八十度以上にも上り、丁度日本の七月頃の暑さです。一寸内地に居ては想像もつかないことですが、晝間は皆半裸體で仕事をしています。道端で水を浴びている人々の姿も數多く見受けました。國土の面積は六十四萬平方料、ざつと日本の倍近くあるところに、人口は僅かに千七百萬人しか住んでいません。そして北が山地で南は平地、國土の大半が廣漠たる沃野です。その間をイラワヂー河、サルウィン河等の大河が縦走して交通運輸の大動脈をなしています。その上に世界第二の雨量をもつ、高温多濕の國でありますから、米がこの國第一の產物です。戦前には年間約三百萬トンの米を海外に輸出していたといふのですから、ビルマはまさに米の國です。僅飢も地震もほとんどないといふのですから、われわ

れ日本人から見ると、全く羨ましい限りです。

このような國土に住んでいるビルマ人は、絶えず自然から傷めつけられている日本人とちがつて、少しもコセコセした氣風はありません。或る點では無氣力と思われるほどに悠々と自然と楽しんでいふといつた風です。こういう國に佛教が榮えて來たのです。國民の九十%が佛教徒であり、佛教を離れてビルマを考えることは出来ません。現在佛教國という點では、世界の代表的な國でありましよう。ビルマの佛教を考えるに當つて、まずこの恵まれた國土のことを頭に入れておく必要があります。ビルマ人の悠々と自然を楽しむ溫しい氣質は、佛教信仰によるものなのか、それとも、この恵まれた風土の爲なのか、そこところは私にもよくわかりません。おそらく兩方の影響でありましよう。とにかく、ビルマ人の佛教信仰は實に徹底したものです。衣食住に苦勞が要らないからでもあります。それが、一般民衆の生活は驚くほど簡素なものであります。それに比べて、目を瞪る様な壯麗なバゴダ（佛塔）や僧院が全國到るところに聳え立っています。私共は數限りないバゴダを見學さして貰いま

した。それらの中には、歴史的古蹟も数多いのですが、最近に出来た新しいものも決して少くありません。今度の世界佛教徒會議の會場となつた「ワールド・ピース・バゴダ」や「マハー・バーサナ・グハー」(大洞窟)等はその代表的なものでありましょう。

ビルマの佛教は小乗佛教と呼ばれています。われわれ大乘佛教徒は、小乗佛教徒と一段と價值の低い佛教だと考え易いのでありますが、彼等は決してそうは考えて居りません。自分達こそ釋尊の佛教を、釋尊さながらの姿において傳えている正統佛教だと自負しています。ビルマ全土には、現在約八萬のボンジー(比丘)が居るといわれます。それらの比丘は悉く、頭を剃り、黄褐色の法衣を着し、戒律嚴守の僧風を堅く守つています。戒律を守らざるものは、如何なる理由があろうとも、比丘とは認められず禮拜供養もされません。私は表面はそうでも、裏があるのではないかと、自分勝手なさもし氣持から、随分いろいろな人に尋ねて見ましたが、誰も一人として、そのような事實を裏付ける人はありませんでした。不飲酒戒を般若湯と稱してゴムカス様な會通エツツの仕方は、少くともビルマの比丘にはない様であります。随分嚴しいものだと思ひ感心せざるを得ないのですが、戒律を守らなければ一般の信者も決して供養しないのだそうです。若し何かの事情で、戒律が守れなくなれば、潔く還俗して俗人としての生活に還る外ない譯です。

ビルマの比丘は、比丘たる以上は必ず戒律を嚴守しなければなり

ません。然し何時でも還俗する自由は認められているようです。そこで私の疑問とした點は、やゝ解明しました。歳若き頃より出家生活に入つた比丘達は、人間的な惱みを如何に解決しているのであらうかと、とくに私は淨土教徒の立場から疑問でならなかつたのであります。その代り、一生を出家生活で貫き通す比丘に對しては、絶大なる尊敬が拂われます。ビルマ人は比丘に供養することを最大の功德だと考えています。ビルマの古都であり、かつ佛都であるマンダレーにおいて、早朝の托鉢僧に對して施食する信者の姿は、眞に心打たれるものがあります。ビルマの家庭では、早朝には食事を攝りませんので、主婦達は比丘に供養するために、毎朝特別に食事を作るといふことです。高德な比丘の足に、一般信者のみならず、政府の要人達迄も、自分の額をつけて禮拜している姿を實際に見て、經文にある佛足禮拜といふことが、ビルマでは現に行われていることを知りました。このような根強いビルマの佛教信仰は何によつて支えられているのでありましょうか。

それは申すまでもなく、佛陀釋尊の正法であります。われわれ大乘佛教徒も、ひとしく釋尊の正法を宣布し、實踐しようとする事には變りはないのですが、歴史的傳統や、地理的條件が異なるにつれて、それらの時代、それらの風土に随つて、如何にして釋尊の正法を實踐するかというところに、大乘佛教の高僧方の命がけの努力があつた譯であります。従つて、大乘佛教は體驗主義の佛教だと

いうことも出来ましょう。釋尊の教え示された正法を、その眞實はかくもあらん、今の時代に釋尊あらしめば、こうも説かれたであろうと、會通し發展せしめたもの發達佛教と言われる大乘佛教の姿であります。

これに對し、ビルマの佛教徒は原始佛教の傳統をそのまゝに護持しようとしています。釋尊の正法と、釋尊の説かれた言葉そのまゝに、釋尊さながらの姿において實踐しようとするのがビルマの佛教であります。従つて、佛教教理の發達とか、展開ということは彼等には認め難いことであるわけです。釋尊の説かれた法、定められた戒律を如何に誤りなく傳え、日々の生活に實踐するかということが最も根本の問題になるわけであります。

今度の會議においても、戒律の問題が随分やかましい議論になりました。御承知の様に、非時食戒という戒律があつて、ビルマの比丘は、正午を過ぎたら如何なることがあつても食事を攝りません。

われわれ各國佛教徒代表は、國賓待遇と申してもよい程の歡待を受けて、大統領以下各要人の招宴が連夜の如く續いたのでありますがビルマの僧(比丘)は決して出席しません。たまたま席に連ることがあつても、われわれが山海の珍味を食するのを目前に眺め乍ら、泰然として絶対に食事を口にしないのであります。この非時食戒について、外國の代表から餘りにも窮窟ではないか、その精神をもつと近代的に生かせばよいではないか、との意見も出たのであります

が、それに對してビルマの比丘は次の様に答えました。「戒律は佛陀の定め給うたものである。それに従うことが佛道に歸依することである。佛の定め給うたものを人間が變更することは出来ない。もし變更する必要があれば、佛が再び地上に現われて正すであろう」とわれわれはこの言葉の中に、ビルマ佛教徒の徹底した歸依の心を見出さずには居られません。

ビルマの(僧)比丘は嚴肅に戒律を守つています。頑迷といわれようと。保守と言われようと戒律を實踐するところに、佛に歸依する道があるのです。一般の在家信者は、そのような戒律嚴守の比丘に供養し、歸依することが、同時に佛と法とに歸依することになるのです。三歸依の精神がビルマ佛教の根本精神であります。

最初にも申した如く、ビルマの地理的風土的な條件が、原始佛教そのまゝの姿を護持することを可能ならしめたのもありましようが、私共大乘佛教徒は、大乘菩薩道の精神を生かすために、今一度原始佛教の精神を顧みなければならないと思うのであります。

ビルマの出家佛教の在り方を、そのまゝ日本に移すことは出来ることでもありませんし、また意味のないことではありますが、われわれ在家佛教徒たるものは、更らに三歸依の精神に生きなければならぬと痛感させられました。日本において僧侶と呼ばれているものは、自ら卒先して、佛に歸依し、佛に供養することを忘れてはならないと思います。

まだ、いろいろと述べることは澤山ありますが、今回は一應これだけにとめておきます。

ある日蓮僧と語る

須藤隆仙

「須藤さん、この頃はね、私達は随分頭を痛めているのですよ。ほら御承知の〇〇宗とか△△宗といった如き日蓮系の新興宗教ね、あんなのがはびこつて來て困るんですよ。」

「大變でしようなあ、直接の問題ですからね。實をいうと大騒ぎするような問題ではないのですが何せ氣の毒で見えおられぬような事をしでかすのですからね。それに新興宗教というのかどうか〇〇宗とか△△宗の中には随分日蓮宗を攻撃してあるという者があるというではありませんか」

「そうなんです。それなんですよ。何せ悪い事に日蓮聖人が折伏しやくふくという事をいわれて其れを誤解して私等の宗派や他宗に喧嘩すれば其れで良いものと思ひ込んでいるのですからね。幼稚なものですよ。」

「やはり折伏の中には日蓮宗も對象になつてゐるのですか。私はまた主に四箇格言の念佛、禪、眞言、律等、それに他宗教を折伏の對象にするかと思つて、それで日蓮宗を攻撃するというから變だと思つてたんですが」

「折伏の對象にはなつてませんね。唯、日

蓮聖人の立場は末法の現在に折伏を主とすべき時であるというのであるから、もつと日蓮宗は他宗を攻撃して折伏主義に勇敢であれというのですよ。

「つまり現在の日蓮宗は妥協的だというわけですね。」

私は現在の日蓮宗が折伏などという事を一寸も口に出さないのが正しい日蓮の立場を開顯するものだと思つておりますね」

「實は私もそうなんです。もし現在の世に聖人が出ていたならば折伏なんて事はいわなかつたと思うんですが」

「いや言つたかもしれませんが。むしろいつたでしょう。四箇格言を立てて折伏を主とする立場は純粹な日蓮教學の粹なのですからね。ただし問題は此處ですよ。日蓮が念佛は地獄に落ちる、禪は天魔の業だ、眞言は國を亡ぼす、律は國賊であるといつて他宗の難をついたのも實は法華經の價值を現わす一つの手段だつたのですからね、早い話がこの様な非難する諸宗があつたればこそ日蓮宗というものも出來たのでしょう。したがつて四箇格言等という事は日蓮聖人にとつてみれば一つ

の裏ですよ。日蓮宗に對する裏ですよ。もつと解りやすく言えば高い山の頂上に至るには多く麓よりの土をふまねばなりませんね。その麓よりの土が日蓮聖人にしてみれば四箇格言にみるような諸宗だつたわけですよ。だからこの事は淨土宗などとも言える事で、聖道門と淨土門を立てて聖道門を捨てて淨土門をとるといふ事は、一面からいえば淨土門という裏役を聖道門がつとめたわけであり、淨土門という頂上に至る迄の土が聖道門だつたわけですよ。だからこの事に氣がついたなら、四箇格言とか折伏とかいふ事も、結局内的な自覺であつて其れを外部へ持ち出して騒ぎたてるような立場にあるものではありません。

各宗には皆それぞれの教義というものがあるのですからね、その教義は皆それぞれ内的な意義で外部的な意義ではありませんよ。一つの家を建てるにも各家各家それぞれの理由があつて自分に都合のよい様な建築をするのでしよう。それを出來上つた自分の家と人の家とを比べて見て、おれの家は一番よいんだ。お前の家の建て方は間違つてゐる。壊してし

まゑ、などといつたら狂人ですね、それと同じだと思ひますが」

「いや本當ですな。私が日蓮聖人が現在におつたらというのも、其のような自宗の教義への認識がもつと定められていただろうという意味だつたのですよ。」

「自宗の教義への認識という事は必要ですね。大きな立場から、自宗を眺めてみる。自分の宗派は佛教のいかなる立場に立つてゐるか、更に宗教という上のいかなる立場に立つてゐるか、これを認識する事は宗教人として正しい立場を認識する事だと思いますね。」

結局〇〇宗だとか△△宗のような狂氣沙汰は正しい自分の立場を認識しておらぬからでしょう」

「勿論それもありますね。さつきのお話で四箇格言とか折伏主義とかいふものは結局内部的な問題だといふ事をいわれたのですからね、△△宗や〇〇宗の連中は聖人の教えに忠實であれば雄々しく折伏せよ、即ち折伏は外部的でなければ駄目だといふんではがね。」

「私はほん少しですが日蓮系の本を讀んだの

ですがね。それ等の中には四箇格言の事や折

伏の事が全く書かれていないのですよ。Bさんの新時代の日蓮教學、Kさんの日蓮宗の教理、Hさんの日蓮聖人の宗教、もう一つ誰かの日蓮宗大意等々ですがね、それで日蓮宗というものを見直したのですよ。それに學生時代は日蓮宗の寺へ傳道に出て宿泊したり、日蓮宗の坊さんと親しく話しあつたりしているうちに案外日蓮宗の坊さんつて人柄が良いのだなあとと思うようになったのですよ。失禮な話ですけどね。それで四箇格言や折伏という事も内部的な問題として、いわゆる單に法華經の價值を高める一手段としての存在であつて、勿論あれ無くして日蓮の特異性は無いがそれが外部的に他に喧嘩をして迄働きかけるような狂氣沙汰の母體ではないんだという事に氣がついたのですよ」

——一般的な立場からいうとそうなのですが聖人の御著書などを拜すると仲々頑強な所があるんでね。結局あのような所をもつと現代的に合理的に解決する方法がほしいのですよ。

「出来るじやありませんか。それはあなた方

の問題ですよ。

私は日蓮聖人の書や御消息等を読んでみてね益々日蓮の他宗非難は單なる内的な立場だという事を強く感じたのですがね。

聖愚問答鈔（しょうぐもんどうさう）でしたか、ある人が日蓮に「善導（ぜんどう）や法然（はつぜん）は宗教的偉人でお前などより偉いんだそして又佛教界の先輩なのだ。それを何故に非難するのか。お前の言は無茶苦茶じゃないか」といつてるのに對して日蓮は「汝が言然也。余も仰いで信を取ること此の如し」といつてるね。その後で「唯自分は人の人格でものをいうのではない。法という立場の上に公平無私な言葉をはく丈だ」といつてるでしょう。これ等は日蓮宗の方の大いに味う可き言葉だと思いますよ。

それに又淨土宗を罵倒するにしても淨土宗が聖道門を捨てたという事に憤りをかんじ、更に難として捨てた經文に法華經が含まれているといふので憤怒しているわけですね。立正安國論（りっしやうあんこくろん）に「曇鸞（どんらん）、道綽（だうてつ）、善導（ぜんどう）の謬釋（びうしやく）を引いて、聖道淨土、難行易行の旨を建て、法華眞言、總じて一代の大乗、六百三十七部、二千八百八十三卷、一切の諸佛菩薩、及び諸の世

天等を以て皆聖道、難行、難行等に攝し、或は捨て或は閉ぢ、或は閑（ひま）き、或は拋（な）つ、この四字を以て、多く一切を迷わし、剩（さ）さへ三國の聖僧、十方の佛弟を以て、皆群賊と号し、併せて罵（のの）罵（り）せしむ」とありますね。そしてこれが淨土の三部經にある「唯除五逆誹謗正法」と法華經の第二にある「若人不信毀謗此經、乃至、其人命終入阿鼻獄」の文、即ち正法を誹謗（ひぼう）してはいかんという誠にそむくから、念佛の行者は地獄に落ちるといふわけですねこの念佛を罵倒する理由などは明らかに内部的な問題ですね。

だいたい聖道を捨てるという淨土宗の立場は淨土宗の教相判釋といつて教義を立てる理由の一つなのですから、先の家の建築の問題と同じで自家の理由ですよ、これは他家へ行つては通用しません。あく迄も自宗の問題即ち内部的な問題ですよ。して日蓮がこれを攻撃するのも自宗の問題として、即ちあそこの家はあの様に建てるが、あれでは駄目だこうなつてゐるからあのような建て方は駄目だ、おれの所ではあの家の建築上の誤りを指摘して、あのような誤りのないようという風に

建てようというのであつて、何もあのようでは駄目だから行つて叩きつぶせというのではありません。

即ち内部的な浄土宗の問題を更に内部的な自宗の問題として取り入れた丈ですね」

「いや良く解りました、そのような氣持で聖人の御著書等を読むと一益有難さが感ぜられると思います。それで祖師の言葉の頑強さを現代に簡単に合理化出來ると始めにいわれましたが、その方法は

「宗教は知性を超えてというが、やはり知性は必要なのですね、こんな事は事改めている必要はないでしょうが、中には宗教には知性は禁物だ等という馬鹿げたことをいう人もあるのでね。

やはり立派な教學の先生にたのむ事ですよ。祖師のお著書や御消息を眞に現代に正しく生かす爲の方法をね。愚盲な宗教人、私など愚盲な宗教人の一人ですがね、愚盲な宗教人を無くする爲に、やはり叡智、それは宗教的叡智とでもいうか、そういうものに富んだ指導者が必要なのですね。私などは愚盲だからいづもいろんな先生方の本を読んで宗教人とし

ての道をあやまらぬよう勉強しておりますがそれでも大部危いけどね……。日蓮宗にもいゝるではないですか。徳者としても學者としても尊敬出來る立派なお方が、R大學のK教授なんかどうですか。ああいうお方に蒙を啓いて頂くんですよ。勿論狂信者を増やして愚民を温存しているような宗派人から教育せねばなりませんかね」

「仲々面倒でしょう。しかしやらなければ駄目ですね。頑張りますよ。

それから今一つ、歴史的な事實として困る事があるように思うのですがね。

「例えば」

「善導大師が投身自殺した等という事は

「傳記も曖昧なものは多いのですがね、それよりも前に述べたような正しい宗教人の立場に立つたならば、そんな問題は胸中に無いはずですね。

日蓮聖人の「春初御消息」でしたか、衣は薄し、食は絶えたり、夜は寒苦鳥にことならず、晝は里へ出でんと思ひまなし、既に讀經の聲もたえ觀念の心もうすし」いうのがありますがね、あれを見て笑う人があるんで

すよ。だが私は笑う人が變だと思ひますね。善導さんにしろ日蓮さんにしろ、寒がり飢ていたとか、投身自殺したとか、そんな事で念佛の信仰や、法華の信仰がぐらついたりするものではありませんよ。歴史的な事實の中には皆われわれの考え方一つで意義づけられるものばかりが語られていると思ひますね」

「これは一寸むづかしいですなあ。一寸解しかねる所もありますが、とにかく今日は良い話を聞きました。宗教の問題はもつともつと惱みつつ勉強しなければ駄目ですね、今後も互に佛教徒として手をたずさえて進みましよう。

東京高等保育學校

品川區西品川5—1002

- ◇修學年限 一カ年
- ◇資格 高校卒、高女卒
- ◇人員 60名
- ◇書類 願書、履歴書、卒業證明書、査料千圓
- ◇査業 日料業宿典學入
- ◇教授 3月30日午前10時
- ◇授 千圓午後2時
- ◇授 午後なし
- ◇寄 試験教諭資格附與
- ◇特 要20圓

袋 中 上 人

大 橋 俊 雄

一

(23)

秋もすつかりとくれて、冬の日のさし始めた或日、山紫水明の宗教都市、京都のまん中三條大橋の東のほとりに、東山の翠巒を背景に、鴨河の清流に臨んで、大銀杏樹の間に巍然として聳え建つてゐる巨刹を訪づれた。これが都人たちに「檀王さん」と通稱され、景氣の主護主夜神尊と朝市で有名な、朝陽山旃檀王院法林寺なのである。生徒を引率して修學旅行に入洛した私の宿加茂川館は、不思議と此寺の門前、部屋からは窓越しに檀王がはつきりと目下に見える場所にある。檀王が七百年の昔、浄土宗三條派の祖望西樓了惠上人の舊蹟で、その芳躅を慕い、宗史資料の拜觀旁に訪ずれたのは、もう數年も前のこと。その折見せていたゞいた中にも袋中上人像の琉球國王自畫賛という肖像畫の一幅は、今に印象的で、一時忘れられていたものが、急に腦裡によみがえつて來た。袋中上人といえは、徳川初期に出た浄土宗隨一の學徳僧で、歩を琉球にまでも進め、居

ること三年、其地に偉大な行蹟をのこした人であつた。そして此處に宿したのを機に、夜の檀王に詣で、朝市に待つたのであつた。

二

上人は奥州岩城郡に、父佐藤氏の次男として天文二十一年（一五五二）正月産聲をあげ、その幼名を徳壽丸といつた。日本各地を求道行脚して、安藝の嚴島に光明院を創建した大徳、以八上人はその兄で、幼い頃から虚空菩薩の申し子だといはれていとも大事に育てられたが、佛教篤心者であつた両親の感化もあつたのだらうか、四五才頃には遊び事をするにも、他の童たちとは異なり、石をつんでは寶塔といい、土を練つては佛像をかたどり、友の童に教えて拜がませたともいわれる。七歳の時能滿寺の存洞和尚が叔父に當るの

で、此の門に入つて學問に精進することになつたが、五歳にして早くも千字文を誦んで、六歳の時には五經を誦した徳壽丸にとつては、學問が唯一の楽しみで、九歳の頃には浄土宗正派の經典をはじめ、

多くの經論祖釋を暗誦して、師を驚歎せしめたのであつた。その後
も吼々としてうむことのない徳壽丸は永祿八年（一五六五）十四歳
の春を迎え、その春叔父の存洞良要について剃髮染衣し、名を袋中
と改めた。正式に淨土宗名越派の僧となつたのである。名越派とい
うのは、三祖良忠上人の門下に七哲が出て、夫々に一派を開いた中
に了惠道光の創めた宗團で、此派にぞくする人は、丁度鎮西派の人
が譽號を、藤田派が炭號を、一向派が阿號を用いると同様に、良の
字を用うる習慣となつていたので良定と諱をつけた。袋中良定とい
うのが、名越派としての彼の法名であつた。或る時、存洞師が試み
に「袋中とは其意如何」と問ふた時、「錐袋脱するの意歟」と即答し
たというが、まことに「賢士の世に處する、錐の囊中に存する如く
未必ずあらはる」の謂にもれず、上人の一生は行蹟顯著なるものが
あつた。以來、矢の目の如來寺や大澤圓通寺など當時の名越派教團
の叢林に入つて研鑽にこれにつとめ、二十五歳の春には江戸に出て
白旗派の増上寺に掛錫して淨土宗學を究め、傍ら野州足利學校の講
席に參じて禪儒の祕籍を閱讀するなどして、内外の學を習修しひた
すら知能を啓發したのであつた。

上人の鋭鋒はすでに囊中のものではなく、淨土宗學は名越と白旗
の兩流を究盡し、内外の學解も成滿したが、その後と雖も尙も東西
に名匠を訪ひ、求法研鑽を怠ることなく、天正八年（一五八〇）偶
々故郷檜葉の成徳寺より入山の懇請があつたので、孝心深き上人は
喜んで、同寺十三世の法灯をついだ。時に二十九歳。全く兩親に水
菽の孝をつくし、厭離穢土欣求淨土をすゝめんがためであつた。

三

青年時代の袋中は、思想的な悩みから一再ならず死を決心された
こともあつた。この悩みはよほど深刻な辛い問題でもあつたらしく
後日になつても、この事について彼は書き記している。晩年の一信
者に送つた消息の中にも「一たび身亡シテ、何ゾ心ノ流轉アラヤ。
爾シテ自心ヲ起シテ公案スルコト二十年ニ向トス。明師ヲ尋ニモ緣
ナシ。疾死シテ自知センニハ如ジト思ヘリ」とつゞつているのであ
る。如何に深刻な悩みであつたのであらうか。よみがえつては夢に
ふとさしのぞき、冷汗を覺えることもあつた悩み——その悩みは青
年時代にありがちな、理性のみによつて、世をはからんとした悩み
であつた。疑いの生じないうちは、これでも済まされたが、疑問が
萌したあかつきは、何とかしてこれを解かんとする心のあせりがな
いでもなかつた。青年時代の上人にとつては、あらゆるものの價值
は否定されねばならなかつた。佛さへも其の例にはもれなかつた。
彼にいはせれば、泥木圖像はただの物質にしかすぎずと云うのであ
つて、信仰の對象とはなり得なかつた。彼の信じ得るのは、たゞ一つ
己れの理性のみにしかすぎなかつた。従つて經說なども信じ切れぬ
という氣持もあつたらしい。佛像や經說が、彼自からにとつて何も
のをも意味しなかつた時、佛者僧侶と云う立場に立つてもなやまね
ばならなかつた。我法という魔の影が、知らぬまに寄り添うていた。
自分だけが尊い、この世のみが尊い。六根はこれ淨土であり、現世
はこれ淨佛國土であると云う生半可な悟りめいた氣持もあつた。そ
れは執拗な我であつたが、しかし上人はかうした。氣持も否定しつ
づけた。何事も否の一事を以て心よしとした上人のなせる業は、我
法深きが故であつた。「予先ニ他ノ示ヲ受テ、燒灰埋土ヲ決定シテ
身冷ク心穩カナリ」とする心境、往々自殺者が歩めると同じような

道を右往左往した上人も、一時は否、一再ならず死を決心なされていたのであつた。智によつて得んとし、又得た究極的な思想も、手をのべれば延べる程遠いものになつてしまふ。その悩みは二十年にもなん／＼とするほどに、永い／＼悩みであつた。

その悩みにも心の流轉がはじまつた。往生要集の空觀の文を見得てから後のことであるという。要集の著者恵心僧都は、元祖法然上人によつて日本に於ける念佛の先達といはれた人であるが、此の文によつて袋中は地獄の恐怖を身を以て感じ、罪惡に對して深い敬虔の念を生ずることが出來た。淨土宗では信後信法ということをしてゐる。即ち我れは罪惡生死出離の縁なき凡夫なりと信じ(信機)、阿彌陀如來の御本願によつて此の凡夫が出離生死を得ると信ずる(信法)ことである。こゝに於ても上人は我執をはなれることができ、自分の力の余りにも小さいことを知り得たのであつた。そこから大なるものゝ御心を、そのまゝに信ずる氣持が萌して來、と同時に他をかえり見る餘裕が出來た。結局、要集にみちびかれて素直に信ずる心が生じてきた時、淨土宗人としての道が開かれてきたのであつた。これから後は、心の底から、彌陀の御本願を信じて念佛申すことが出来るようになった。時に上人三十九歳の時であつた。

四

夙に入明の壮志をいだき、その機縁の淳熟するのをまつていた上人は、或日のこと兄の以八上人にこの事を打ちあけた。そして日本に未だ渡つてきていない經論を請求して、愈々弘法のために盡力したい旨を申したのであつたが、時に兄は日本に前々より傳來して居る藏經さえ一通よんでいないのに、入明を志すということは鳴濤が

ましいい沙汰であると厳しく誡めたので、成程と合點した袋中は以來藏經の披閱に余念なく精進したが、入明の志やみがたく、遂に慶長八年(一六〇三)五十二歳にして郷里を後に西下したのであつた。キリスト教の禁壓と封建制度の確立のために、鎖國令の發せられんとする當時にあつては、たゞ九州にあつて渡航の便を求めんとしても、中々に一布衣の野僧が孤錫單身その目的を達することは容易なことではなかつた。暮らせど入明の便船を得ることは出來ず、遂に上人も入明を斷念して、便航を琉球に求めた。其れほど入明の困難な時代であつた。その頃、唐船の來着する港としては筑前の博多、肥前の五島・平戸・長崎に、薩摩の阿久根があり、此港以外の來着は厳しく禁じられていた。「昔竊寐集」や「琉球神道記」に依れば彼の往復共に利用された港は平戸であつたらしい。南の國琉球での滞在三ヶ年の間は、ひたすらに淨業と教化に精進し、琉球國王尙寧王の如き深く上人の學德に敬服し、桂林寺を建立して具さに四事の供養をなしたとさえ云われる。檀林法林寺所藏の袋中上人の肖像畫は、絹本淡彩二尺の大幅で、眞摯な彩管が運ばれ、こゝに記された長い贊文には尙寧王が上人に如何に歸依渴仰されたか、その切々たる眞情が溢れ出ているのである。この贊の終尾の落款には「辛亥春三月琉球國王尙寧圖併拜題贈袋中上人座下」とあり、辛亥は慶長十六年(一六一一)に當つてゐる。當時袋中はその前年には伏見に留錫し、此年には其處で得たパトロン伏見次郎兵衛の歸信によつて檀王法林寺の創建にあたつてゐた頃であり、時偶々島津家久のために捕はれの身となつて在國してゐた王は、先に親しく教化をうけたよしみで面接し、自畫自贊の像を上人に送つたのである。上人の琉球についての關心は可成りに深かつたものらしく、それは「琉球神道

記」五卷、「琉球往來」一巻の全巻にみなぎり、その教化は琉球全土にあまねく、太平洋戦争中までは、上人弘布の念佛が「小縣浄土」とか云つて残されていたということを聞いたことがあるが、それも今となつてはどうなつているのであらうか。又の日布教成るの時がやつて來た時には、此の地にも袋中の芳躰を慕つて念佛弘通ののろしを擧げて欲しいと思うのは私一人ではあるまい。

一時は、更にこゝから入明へと志をおこした上人も、望郷の念にかられ、一應布教の目的の達し得られたのを期會に琉球島民の惜別を後に、慶長十一年肥前の平戸に歸つてきた。時に五十五才の身であつた。それより筑後の善導寺に詣で、石見温泉津薬師堂を拜し、途中山崎の大倉寺、橋本西遊寺に留錫して、京都に入つたのは同十六年の未つ方であつた。入洛した上人は三條大橋の東畔に、伏見治郎兵衛の歸仰をうけ、その家の後方にあつた藪地を拓いて草菴を建てた。というのは此の地が會つて望西樓了惠の居住していた舊蹟地で、應仁の亂の結果全くの廢址となつていた故地であつたからである。これが現在の檀王法林寺の始まりである。念佛の弘道を専らに教法の弘通に努めた結果、その徳を慕つて集まるもの京洛の内外にあまねく、松平隠岐守・同嫡子越中守・所司代板倉周防守等の貴紳をはじめ、道俗は庶民に至るまでその風を望んで、そのもとに集つた。洛北氷室に、東山菊溪にと庵を結んで心に任せて往來したのは還暦をすぎたことであつたが、元和八年（一六二二）には一念發起して南都の佛閣を巡歴し、眉目山のほとりに憩い、そのあまりに景勝地なるに心ひかれて、念佛寺を建立したのであつた。行くところ縁に任せる、念佛の道場を建て、足を留めて念佛の弘道をはかるのは、吉水の流れを汲む念佛僧として當然すぎる程當然ではあつた

が、一所不住をモットーとする上人としては、此れを年末の本意とし、念佛弘通に終始したのであつた。そして建てた念佛寺には、經藏が建立され、淨瑠璃寺から譲り受けられた一切經が納められた。

五

淨瑠璃寺は山城國相樂郡西尾村にある幽閑な清境である。上人は七十二歳の冬から此の地に居を占め、専ら念佛の淨業に精進し、その徳をしたつて訪づれる者たちには醇々として念佛の法がとかれ、念佛の聲がたえまなく續いた。日々供養を捧げる人々のあつた中にも、黒田新藏は庵を建てた。それは瓶原という欣西の行を修するにふさはしい土地に建てられた心光庵で、晩年靜かに過された草庵は實に此いほりであつた。だが此の心光庵にも、其の身の不甲斐なさをあわれみて遁れ去る時期がやつて來た。それは郡内に重罪を犯した者があつて死刑に處せられるということを知った時、とるものもとありあえず上人は官におもむき、ひらに赦免を請うたのであつたがその請は到底入れられはしなかつた。幾度となく請うたが、請う度に拒否されつづけられた。これこそ教化の及ばなかつたが故であると、深く天地神明にわび、且つ悲しみて「いつみ川雲井の空になかれてし、いま行く末は風にまかせて」の一首をのこして、十三年の長い間住みなれた庵を後に、木津川の急流に身をまかせて立ち去つたのであつた。群生の罪を自からの罪として憂うる老敎家の道念こそ、勿體なくも尊いものがある。その心念をもつてしたなればこそ念佛教化は偉大なるものがあつたのであらう。そして行き辿つたところは木津川の西岸にあたる丘陵、綴喜郡飯岡村の會つて精舎のあつた勝地に、こゝでも奥林三郎兵衛という人のパトロンを得て西方

寺を開創することが出来た。しかし此處での生活は一年にもみたなかつた。淨土からのお迎えは、念佛弘通に年をかしはしなかつた。

六

往生についてこんな逸話も残されている。上人は寛永三年三月十四日に往生を期待せられていた。入明を志し、中國の宗風を慕い、善導大師を追慕していた上人にとつて、此の日は高祖善導大師の忌日に當つていた。しかしこの事は望まれず、あらためて命終の期を願はれたが驗しがなかつた。上人はつくづくと歎息し、同二十五日の曉、念佛しつゝ思はず哀れを覺えてほろりと涙した。いままであれやこれやと所縁を思い出し、思い連ねて、心を往生の一處にいざなわんとしたが、これとても無駄であつた。「安心起ラヌニ付テモ念佛スベシ、起ラバ尚可レ念、哀レナルコト有ハ思出シテ可レ念、サナクバ可レ念」これこそ上人にしてはとばしり出でたる念佛觀であり、透いて徹つた露のような美しい清らかな心のあらはれであつた。「安心起ラヌニ付テモ念佛スベシ」このお言葉は上人にして行の如何に大切であるかを示した法語であつた。行が先か、信が先か。信行一致は理想であるけれども上人にとつては、念佛の信仰生活に入るのには行が信に先行すべきが、早道であると信じていた。

同じき三月の廿四日、外出の旅から草庵にもどられた上人は、自から草鞋の緒を解かれた。折から降りしきる雨に、臆却がられて手水をせず、濡れた木の葉で手を拭われた。普段ならば口をそそぎ、手水される老僧も、こんなひどい雨にはと思いとどまり、そつと傍らの木の葉に手をかけたのであらう。それは不意になされて、意識的ではなかつた。さて本尊に向い、阿彌陀さまの御顔を仰ぐと今ま

でに拜した如來様とは異なり、さながら朽木のように荒涼と拜されたのであつた。思はず「ハッ」として外に出で、降りしきる雨にそばだちつゝ手を清ませ、再び御佛の前に向い、掌を合はせた。この度のお顔は清く、美しく輝いて尊く拜がまれ、いつしか念佛の聲は堂内に満ち／＼していた。この時にも行が信を誘うものだ、自から體驗したのであつた。

七

寛永十五年（一六三八）の冬の頃より微疾があつて、上人は病床の人となられた。明くれば八十八の高齡を迎える。年からいえば不足はないというものの、弟子たちにとつては容易ならない事であつた。空の星の行時消え去り行くか、そは暗夜にもひとしき時を待つ心情であつたらう。御臨終の前日、辭世の句を記しとゞめたいと、枕頭に用紙を延べさせて、門弟の聽雪に筆受させようとした。所が彼は無學であり、元來非常な惡筆である上、上人御臨終間際のこととて取り亂してもいたのであらう。上人の口からもれる「轉識」という字を、おず／＼と見苦しく書きつけた。それを見かねた上人はやにはに筆をとつて、自からそれに書きつけた。今に残っている辭世を拜見すると、聽雪の筆つけとは反對の側に、兩筆向い合いにそれが、一紙に記されている。「轉識得智トハ代初春ノ霞ノ色ヤソレナラン」と。そして聽雪の書いた二字は墨黒々、味なく拙に残されている。御臨終の間際まで、よく氣のはつた上人でおわしましたことか。釋尊入涅槃の嚴儀に習い、頭北面西して稱名念佛裡に、安養の淨土に旅立たれたのは寛永十六年正月二十一日のことであつた。

浄土への

たより

眞野先生初め皆様御健勝で雜誌「浄土」も益々内容充實して参りました。毎月御送本を鶴首お待ち致しております。小納創刊以來受讀さして頂いておりますが、はや二十卷を過ぎ、今更、今昔の感が致します。(山形市銅町 江ノ目良圓)

諸先生方の御努力により浄土の内容も向上し來つた事を御同慶申上ます。

申上るまでもなく浄土の刊行は大眾に念佛信仰を勧める事に他ならないのですから、一層信仰方面の記事に御留意下さいませ。尙出來れば信者の信仰の告白質疑應答の記事等もお願い申上ます。神戸方面では今日宗教に對し、どの宗教に取つこうかと、ふらふら状態です。時の流れとして此の際佛教々化者が頭張らねばキリスト教一色に塗りつぶされる事と存

じます。プレゼント用にしたいのですが、浄土五十部、百部の各送料代金お手數恐入りますが至急一報下さい。

(神戸市塚本通三丁目 新太哲亮)

私は昭和十七年頃、御殿場の大乗寺で別時念佛を中村辨康師の御指導でやつて頂いたことのあるあの頃の「浄き友の會」の會員です。血の氣の多いせいか、三十年以上も煩悶懊惱して結果法然を求めることになり「浄き友の會」にも入り、増上寺にも随分まいつたのでした。——信仰は兎も角として浄土誌は之を見なければどうにも生きられないのかというような氣分になつて、遂に發刊した年から連續してしまいました。妻子等にはかえつて信じ易いだろうと初めは期待したのですが、一向その無いことは幾らか期待外れです。しかし、伴が徴兵検査の時、内の宗旨は何だ?と訊かれた時、すかさず「浄土宗よ」と答えたそうです。シベリヤに抑留された時、相當(親の遺傳か)煩悶したらしく、そういう時に戰友に眞

宗の坊さんがあつたのに意見をきき、それで救われて煩悶を解消したというので、之も兎も角、曾て「浄土」と答えておいた事の功德と思ひ二重にも三重にも感謝をして居ります。

(東京都天沼二ノ三一九和日庵、七二翁)

浄土の送本を毎日鶴首しております。浄土は一生愛讀致します。

(東京都田端 小山桂一郎)

いろいろ御編輯の苦心が結實して再起充實のようですが、信仰雜誌の面目を發揮して下さい。芝園だよりの私情の記事は甚だ感心しません。昔の浄土を今でも讀み返えています。あのような物を再び掲載する事はできませんか。

(京都市烏丸五條西入ル 木村政吉)

浄土が來ると先ず芝園だより、次に巻頭言を見て、在京の諸師の雰圍氣を懐しんでおります。編輯部諸先生の御奮闘を祈ります。(四日市市光運寺 飯田信弘)

と 師 禪 隱 白

郎 四 長 賊 山



藤 田 和 彦

前號までのあらすじ……箱根山に據る山賊の頭目あご長こと長四郎の捕伐に手を舉げた幕府は、時の聖者白隱禪師に之の仁愛による鎮撫方を依頼し來つた。師は極悪人の善導こそ吾勤めなりと、箱根をさして旅立たれるが、途中よりそれと覺しきうさん臭い男と道連れとなる。その男は今しも寝込んだ師をただ一打ちとにじりよつた……

途端に和尚の持つたる錫杖が、音無しの構に變つて、クワツと眼を見開いた。

「アア、良い氣持で一と眠りしたわい、なんじやお前も眠つてでもいるかと思つたのに、これは又意外じや、大層緊張した顔付をして、何をしておじやつたの——」

問われて長四郎

「エヘ、へ、こりや恐れ入りました。和尚さまがお休みになつて居る隙にも、俺たちは和尚さまの警護の役を引受けて居りますから、用心健固に御守護している心算で御座えやす」と、とぼけて居る。

「そうかい、夫れは大層心配かけて済まなんだの——。而しわしは見らるる通りの雲水じやによつて、欲もなければ、未練もない、鳥目があれば盤若湯も呑むし、無ければ食も採らずに歩きもするが、眠むたくなれば山野にも眠る。實に氣輕な身の上じや。以來そんな固苦しい警護なんぞは、無用じやぞえ」と、きつぱり斷られた。

圖星を指されて長四郎はギョつとした。

「サアサア一と眠りして身體も少し軽く成つたやうだから、ソロソロ出立つとしようかい」

流石手練に丈けた長四郎も、一度ならず、二度までも作戦を早期に見破られたので、熟々考え込んでしまつた。思うに俺の手練で、之れ丈け苦心して仕かけた仕事を、こうもあつさり片付けられてしまふ筈がないが、近頃自己の腕が鈍つたとでも云うものか、其れ共彼の坊主が、魔法使いとでも云うものか、さつぱり譯が判らぬ迄に悩まされていた。

劍道を學んで達人・名人の境地に達せんと欲する者は、禪學を究めなければ其の域に達せられない、即ち禪と劍とは一體にして相通するものがある。禪の極意は、劍の極意にも通ずる事を識らなければならぬ。

何事もなかつただけに、兩人は出立つて旅をつづける。彼は和尚に氣取られぬように、山の細通の要所々々の辻の小枝にチョイと紙片を結び付けながら行く。

沼津の千本松原も早や過ぎて、三島の宿へと辿ついた時分は、日も早や西にトッブリ傾いた黄昏時であつた。

「和尚さま。漸く三島へ参りましたよ」

「オ、そうなの、流石に此の町は繁華じやの、何は兎もあれ三島明神へ参拜してから、宿を取るとしようかい」

と明神に禮拜してから、鍵家へ案内を受けた。早速女中が洗水を

運んでくる。手早く草履を脱いで二階座敷へ通され、茶菓を喫せられながら、

「今日は十里も歩いたやうな氣がするが、お前のやうな元氣の良し付けと一緒に、あんまり疲れも覺えなかつたわい。所でどうじや、三島通れば二階から招く、而かも鹿の子の振り袖で、と云う陽氣な歌の文句を思い出した。何んと今夜は俺も一緒に其の華やかな所へ、案内しては呉れぬかえ、」と戯れられた。

「和尚さん御冗談仰しやつちやいけね、お前さまを案内するよな、庵寺は御座えやせんよ」

「アハ、夫れじやよすかな。今夜はお前と一緒に酌み交しながら話さうかい」

「イエ、アノそれは一寸」

と、どぎまぎする。

「何んじやイエアノソノでは、さばり譯が判らぬではないか、はつきり云えよ」

と、決め付けられ流石のあご長しどろもどろ、

「エー和尚さまに申し上げます」

「何んじや改まつて」

「實は俺つちの弟々子がこの町で指物屋を致している者が居りやしてね、其の男の母親から言傳を頼まれて來やしたので、久しぶりに積る話をして來たいと思ひますので、今から一寸出掛けて参りとう存じますが、歸りはちと遅くなりはいかないかと存じやす。遅く

とも必ず戻つて参りやすから、どうぞお淋しくも有りましょうが今夜のところは俺ちに構わずどうぞお休み下さいやせ」

「アハ、、、そんな言い譯するだけ可笑しいぞえ、俺しが先刻も云つた通り、馴染の振袖に會いに行くのであらうかの、それに俺し一人此所で留守をせいとは、そりやあんまりつれなからうぜ」とせりふもどきで攻め立てられた。

「こりや又手強い、攻め立てようだ。こりや降参降参。そうじや――斯うしましょう。和尚さまのお好きな物を何んなりと選ばせやすからどうぞ御勘辨を」と閉口する。

「そうか、それでは白雪と鯉のあらいで退屈凌ぎに貰でもふかして待つて居るとしようかい」

それは易と安い事と、白雪三本と鯉のあらいを女中に云い付け、腰から貰入れの「印籠」を無難作に取外して禪師の前に差し出して立ち去つて往つた。

あとに禪師は貰入れの「印籠」を熟と視詰めて大きく頷いた。

あご長は町に出るなりすぐ、定め場所へ赴くと、既に子分共は山の辻々に結び付けてあつた非常招集令によつて百名以上も集まつて居た。随一の子分二人を招いて斯々而々と苦心の様子を物語つた。次第を聞いて子分共が、

「何んだ親分にも似合はねー、高が七十越した考ぼれ坊主、たつた一人をせしめるに親分が持て余したとは、こりや近頃親分もどうかしているのではねーのですかえ」と不審がる。

「イヤ俺もそんなような氣もするんだが、何んとしても不思議な坊主に出會つたわい、どの手を用いて遣つて見ても、凡て風船玉と取組んで居るようで、つるりつるりと抜けられて、此方を向いて笑つてゐるんだから、どうにも手がつかぬわい。兎も角彼の坊主の胴巻の中には、小判で貳百兩は確に入つてゐる。何んとか片付けて奪おうとしたが、どうにも手に乗らぬ。仕方がないから今夜丑満時を期して、あの坊主をバラして小判を奪るより外がない。夫れでお前達の手を借りた次第だ。就いては此の鍵家の周囲は勿論、町の要所々には子分達を、嚴重に固めさせ、取逃ぬよう手配りを抜かるなよ」

「イヤモー親分其の事なりや百も承知、貳百も合點でげすよ」

「それで後學の爲に聞かして置くが、昔明智光秀が主君信長公を本能寺で誅略した時には、光秀の三羽鳥と囀われた安田作兵衛初め三人の四天王が館に火をかけて、遂に信長公を討ち取つた、此方は高が考いぼれ坊主たつた一人を片付けるのだから、仕損じのないよう必ず成し遂げろよ」

と、嚴しく下知した。

「イヤモー親分其の仕事なら大丈夫、貧乏ゆすりも、させるもんじやございやせぬわい」

「どうせ袋の鼠だ、ナア皆の者」

と賊徒等は互に冷酒を酌み交しながら氣勢を擧げ、今宵の打合せ萬端に時の積るのを待つていた。

やがて時刻が到來したから三人は竊に鍵家の裏手から、手練の身輕さで塀を乗り越え、目的の二階座敷へ忍び込み、内の様子を窺い

見るに森閑として、人の寢息の氣配もなかつた。不審に思つて玄關へ立ち戻り調べて見たが、笠も杖も草履も揃つてある。又立ち戻つて障子紙を突き指して、中の様子を窺い見るに、人の寢て居る様子はない。愈々不審は加わつたが、斯くては果てじと用意の水を敷居に注いで、無音に障子を押し開け、寢床に忍び寄つて熟々視たが、枕丈けはあるが、和尚の身體はない。これは又意外と行燈に灯を點じ、よく／＼視たが姿は更にない。隈なく周囲を見廻はす途端に、近かくでエヘンと咳拂いの聲がした

こは又如何にと正面の床の間を見るに、今まで床置と思ほしき、柏の木の盆栽はなくて、和尚の座禪姿が、いとも神々しく現われている。

あご長初め二人の賊徒等は黒装束に覆面姿で、然かも大だんびらを引下げたまま、此の光景に打たれて、戸迷いし其の場に座り込んで、互に顔を見合せ、暫し呆然として言葉もなかつた。

「オ、お前は宵に訓染の許へ會いに行くと云つて出かけたから、もう歸る時分と思つて心待に待つていたのだが、其れとは異つて大層物々しい身装りをして、而かも三人連れで、俺しの座敷へ忍び込んで來たとは、こりや一體どうした事じや」
問われてあご長大いに周章狼狽し

「ヘエ／＼、あの只今町の取沙汰では、此の三島へ大盜賊が侵入し、和尚さま御所持の金子を奪うとする者があるとの噂を聞きましたので、大急ぎで警戒に當らせる心算で、子分共を隨へて參つ

たので御座えやす」

と白を切る。

「オ、そうであつたか、其れは大層親切なお言葉じやが、俺しはそうとは受取れぬぞよ、今お前がさも最もらしく此の町に盜賊が侵入して來たとか申すが、其の盜賊の發頭人とは、即ちお前達の事であらうが」

と嚴しく詰め寄られる。

「イエ／＼減相もない、何んで俺つちが和尚さまに對し、其んな大それた事を致しましょうや」

禪師は、きつと山賊共をにらみつけて叱る如く説く如く仰せられた。

「わしが今お前達に云い聞かす事がある。心を落ち付けて良く聞けよ。そこな、山賊あご長、長四郎、其方は箱根を根據として多くの手下を隨え數年前より、無辜の旅人を害し、あまつさえ大名の行李及び金匱にまで略奪を恣にする態坂長範以來の大山賊であらうかの」

と、山賊の仇名まで看破せられた。

あご長初め子分共は、其の慧眼に恐れ入つて縮み上がり、思わず其場に平伏した。

(次回は山賊あご長長四郎の懺悔へとつづく)

施本に

浄土トラクト

B6版
十六頁

竹中信常著

正信へのみちびき

現下新興宗教の功罪を論じ
そのヒロボンの病根を鋭く批
判すると共に、正しい信仰の
あり方を適切に指導する。

藤井實應著

一枚起請文

法然上人の全信仰の結晶た
る一枚起請文をば、懇切に解
説せられてある。

法然上人鑽仰會編

信徒必携

信者として之だけは心得お
くべきことがらが、教義から
行事作法に到るまで明示され
ている。

定價一部十圓、○十部以上八
圓、送料十部毎八圓増○五
十部以上七圓、送料五十圓
○百部以上送料當方負擔

芝園だより

○會員の多數の方々より賀狀を頂
きました。誌上御禮申上げます。
○いろいろ御要望もあり、更にこ
なれやすい宗教誌として發展致し
たいと存じます。
○毎日新聞社の山崎安雄氏は出版
界の通で、昨年面白い出版界話
を出されていたが、最近、四月頃
出る「東洋の名著」という本の中
で、中村元氏は、『老大家である吉
田絃二郎氏が雑誌「浄土」に毎號
自分の心境を述べたすがすがしい
感じの小品を寄稿している。一般
には知られていないが、その心境
が佛教にきわまつている一つの事
例として報告しておきたい』と書
いておられますよ、と便りを頂い
た。
○本號は昨年末ビルマへ赴けた石
井眞峯氏と雲藤義道氏とに御忙し
い中特に玉稿を頂いた。
○新トラクトは現宗教界の有様に
對して、出ずべくして出でざりし

邪信反省の紙の彈丸であつた。果
然、全國より問合せが殺到した。
曹洞宗・眞宗といった方面からの
注文も可成。再版發行しました。
○こういった線に對し、本號須藤
氏のものも興味深い。氏は上記ト
ラクトをも中外誌へ好意的に紹介
されたが、これが又、流布のスピ
ードを早からしめた。
○藤井氏の一言芳談は今回で終了
しました。先日も之を教育大の小
西甚一助教授、芝高校の半田正義
先生等輪讀會をなされていると聞
いた。今まで目にふれる所があり
ながら余り勸傳とか、法語集のよ
うには使われなかつたものです。
幸、一言芳談抄は岩波文庫で出て
おり坐右の書としておすすめ致し
ます。
○教學院の一月研究會は二十九日
中村康隆氏「病床授戒と臨終出家
——法然上人前後の習俗——」です。
○同日、佛教音樂の講習會が、明
徳幼稚園で行われる。此方面で佛
教界の研究の奮起が期待される。

宗務所で御詠歌の黒谷和讃等の音
盤が今後出るそうだが、之も案外
力強い傳導線として口から口へ、
耳から耳へ、心から心へと伸び擴
がつていくものだ。
○一月號の訂正を二つ。對談の記
事中、大谷光潤とあるは瑩潤の誤
り。年賀の中で岩手縣の昆野秀賢
氏の肩書に宗會議員とあるは、誤
りで、氏は其でなく、他の宗門職
はあるが特に肩書を附さずに申込
まれたもの。それぞれおわび致し
ます。

「浄土」 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十年一月廿五日印刷
昭和三十年二月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

東京都千代田區神田保町三ノ十
東京都港區芝公園五ノ一〇
電話 芝(四三)一三二八

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式

一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

團體宿泊御案内

一、當寺本堂庫裡再建完了しましたので五十名位までの團體宿泊を實費で引受ます。

東京都江東區深川三好町一ノ五區役所前

長專院不動寺

正 本 實 乘
電話深川(64)五八四八

幼稚園・保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのモ
ットで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松宮
・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

鐵ブランコ2人乗	¥ 12,000
鐵ブランコ3人乗	¥ 14,000
鐵ブランコ4人乗	¥ 22,000
鐵ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太 鼓 橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付